〈資料紹介〉

「蒙古古石梵經硯」

教授　松　川　　節
（人文情報学・東洋史学〈モンゴル時代史〉）

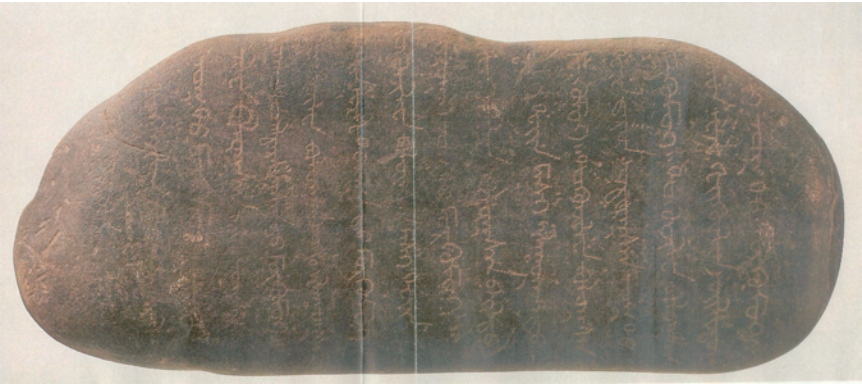
2009年度冬季企画展「The Collection of 禿庵 TOKUAN ―大谷瑩誠と京都の東洋学―」に、第13代学長・大谷瑩誠氏蒐集の古硯のひとつ「蒙古古石梵經硯」が出品された。この機会に、この硯に記されているモンゴル語銘文についての新たな知見を報告したい。

この石硯の上面に漢文４行の刻銘「元梵經石嘉慶／己卯星伯於伊犁／哈什河岸山挈之／歸琢爲硯」がある。すなわち、これは元朝（1260～1368年）期のサンスクリット経典が記された石であり、清代の嘉慶24年、己卯の年（1819年）に徐松（字は星伯、号は宛委山農、1781～1848年）が新疆のイリ地方のイリ河に注ぐカシ（哈什）河沿岸の山で採取し、持って帰って加工し、硯を造ったという。

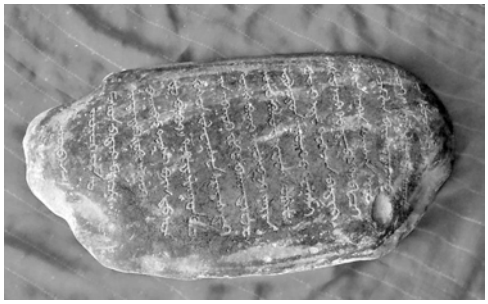
徐松は25歳で進士となり、翰林編修を授けられ、29歳で『全唐文』編纂の責を負い、『宋会要』の編纂を始め、『登科記考』、『唐両京城坊考』などの専著で名を馳せた。しかしその才能を嫉まれた結果、嘉慶17（1812）年に新疆のイリに左遷された。イリ滞在中も徐松は精力的に歩き回り、天山南北で地理調査を行った結果を『新疆識略』、『西域水道記』としてまとめ、今では「西北歴史地理学の創始者」という評価を得ている。

「蒙古古石梵經硯」

石硯の下面に記される「梵經」は、大谷瑩誠氏の「徐松星伯小傳攷」に「硯裏蒙古字梵經断石」と考証されているように、モンゴル文字で記されたものであるが、考察の結果、この文字は「トド文字」と呼ばれる改良モンゴル文字であり、内容はサンスクリット経典ではなく、モンゴル語経典であることが判明した。



石硯下面のトド文字モンゴル語経典



新疆出土のトド文字石経（写真：エルデムト氏提供）

モンゴル人が文字を使い始めたのは13世紀初頭、ちょうどチンギスハンがモンゴル帝国を建国するころであり、古代ウイグル文字を借用してモンゴル語を表記していた。この文字は、ほとんどそのままの形で現在まで伝承されてきているが、モンゴル語の音声を表記し分けるには文字パーツが不足しており、特に16世紀後半になってチベット仏教がモンゴルに伝播するに伴い、チベットやサンスクリットからの借用語をモンゴル文字で表記する必要が生じた結果、いくつかの改良モンゴル文字が考案された。その一つがトド文字であり、西モンゴル・オイラトの学僧ザヤ＝パンディタが1648年に考案したものである。トドとはモンゴル語で「明らかな」という意味である。

この石硯の下面にトド文字モンゴル語で記される経文は、諸仏・菩薩に跪拝するという祈願文の類であり、経典名を比定することはできていないが、注目すべきは一番左の欄外にモンゴル語で「ドゥルベン（＝４）」と記されていることである。すなわちこれはページ番号であり、この石硯は、元々は貝葉形式の連続した石経の４石目であったことになる。貝葉形式のばあい、ふつう、ページ番号を記すのは表だけであるため、我々が下面と称する方が実は経文の表であり、硯が彫られているのは裏なのである。そう知って、硯面を注意深く観察すると、硯溝の脇にわずかながらトド文字の語末の文字払いの部分が残っているではないか。つまり、徐松はトド文字石経の裏面を加工して硯となし、土手の部分のトド文字を削って、上記の漢文４行を銘したのであった。

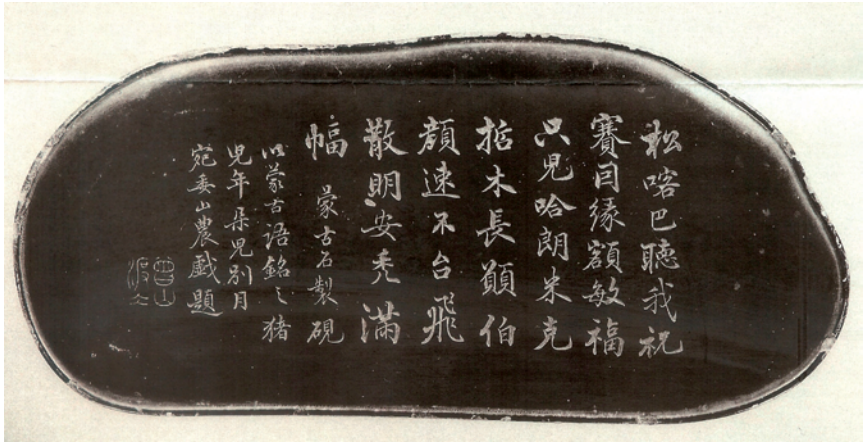
上述のように、トド文字は1648年に制作されたものなので、この石経の成立を元代とみる徐松の説は訂正され、1648年から1819年に徐松が採取するまでの間としなければならない。

中国におけるトド文字資料研究の第一人者である中央民族大学のエルデムト教授に伺ったところ、モンゴル語を記した貝葉形式の石経は極めて珍しく、ほとんど報告されていないとしながら、エルデムト教授自身が新疆のイリ地方で発見したトド文字モンゴル語石経の写真を見せてくださった。一番左にページ番号「グルバン（＝３）」と記されていることに注目されたい。もっとも内容から見て別経典である。

さて、徐松が新疆滞在中に著した詩文とその註である『新疆賦』の「新疆北路賦」に、カシ河沿岸の圍場（猟場）で「梵書の片石を捜した」という詩句があり、註して「圍場額琳摩多水側石上有準部所鐫唐古特字經咒」、すなわち、猟場のエリンマトゥ河の畔の石に、ジューンガル部がここを支配しているときに鐫られたタングート（＝チベット）文字の経呪があると書かれている。

これに対応する記事が『西域水道記』巻四の哈什河の項に以下のように見える：

> 哈什（カシ）河のまた西、吉勒蘇胡（ジルソホ）（蒙古語吉勒蘇胡は日光晃眼を謂う也）嶺の南を経て額林摩多（エリンマトゥ）水が嶺より東して来匯す。（中略36字）山中の石璞、往往にして科木什木博第薩都（ホムシムボディサトゥ）佛呪（即ち華言の観音呪「唵嘛呢叭咪吽（マニパドメフン）」六字なり）・綽克圖贊丹（チョクトゥザンダン）經を鐫し、大旨は如来三十五佛を瞻拝すれば罪孽を解くを得、極楽に往生すと言う。また福を松喀巴（ツォンカパ）喇嘛（即ち華言の達摩なり）に求めるあり。発願の詞は米克（ミグ）



匣の蓋陽に記されたモンゴル語混じりの漢文

哲木（ゼム）と曰い、みな蒙古書或いは唐古忒（タングート）書なり。

すなわち、カシ河沿岸のエリンマトゥ河附近の山中にある磨き石にはモンゴル文字或いはチベット文字で、六字真言「オムマニパドメフン」や『チョクトゥザンダン』経や「ミグゼム」（チベット語 dmigs brtse ma で、ツォンカパに対する祝詞 gsol ’debs を言う）が記されているというのである。

以上を踏まえると、匣の蓋陽に刻された10行のモンゴル語混じりの難解な漢文は、およそ以下のように読むのがよいと思われる。

松喀巴（ツォンカパ）よ、我が賽因（サイン）縁・額敏（エミン）福・只兒哈朗（ジルガラン）を祝することを聴したまえ。ミグゼム！　伯顔（パヤン）・速不台（スブダイ）に明安（ミンガン）・禿滿（トゥメン）の幅を飛散せんことを長願す。蒙古語を以て之に銘す。猪児の年、朶兒別（ドゥルベン）の月、宛委山農、戯れに題す。曾山渡天（印記）

「賽因」、「只兒哈朗」はそれぞれモンゴル語で「良い」、「幸福」の意。「額敏」はウイグル語で「安らかな」の意。「伯顔」、「速不台」はモンゴル帝国～元朝期の武将の名。「明安」、「禿滿」もそれぞれモンゴル語で「千」、「万」の意味、「朶兒別」はモンゴル語「四」の意である。

なお、原典を比定しかねているトド文字モンゴル語経文は、徐松が『西域水道記』で言う『チョクトゥザンダン』経かもしれない。『チョクトゥザンダン』経は正式名称を『吉祥栴檀三十五佛堕罪懺悔法』といい、チベット・モンゴル仏教世界で人口に膾炙した念仏経である。この経典のトド文字モンゴル語訳として、ザヤ＝パンディタがチベット語から翻訳したものが知られている。後考に俟ちたい。